

日本語母語話者のカタカナ語と類義語の使い分け

—カタカナ語とその類義の和語・漢語の調査から—

山下直子¹・畑 ゆかり²・轟木靖子¹

1. はじめに

カタカナ語は日本語学習者にとって学習が難しいものの一つであり、カタカナ語の習得にはさまざまな困難がともなう(石綿2001)。しかし、多くの学習者がカタカナ語を苦手とすることは認識されているが、漢字学習等に比べると先行研究は多いとはいえない(陣内2008)。また、第二言語の語彙学習は、Nation (2001) などによると、語彙に特化した意図的学習と読解等の活動で付随的に学ぶ偶発的学習に分類され、ともに重要であるとされている。日本語教育においても、カタカナ語の語彙指導の必要性は指摘されているが、実際には意図的に語彙を学ぶ機会は少なく、教育現場で十分な指導がされているとはいえないのが現状である(中山・陣内・桐生・三宅2008)。今後、効果的なカタカナ語の学習や指導を検討するため、指導の基礎資料となる調査研究を行うことが重要であると考えられる。

Nation (2001) が分類した三つの語彙知識「語形」「意味」「使用」のうち、山下・畑・轟木 (2015) では、カタカナ語の「語形」(表記)と「意味」に焦点をあてて、韓国語・中国語・タイ語母語話者を対象者として調査を行った。その結果、既習語彙でも聞いて意味を理解できる受容語彙ではあっても、正しく表記できる産出語彙としては定着していないことが明らかになった。また、カタカナ語に関する意識調査の結果からは、母語や英語学習歴により異なる面がある一方で、いずれの母語話者も学習を強く望んでいることがわかった。また、山下・畑・轟木 (2013) では、表記を中心にカタカナ語の指導を試み、指導後には成績が向上し苦手意識が軽減して、学習に対する意識づけの可能性があることが示唆された。しかし、その他の学習困難点も多く検討が必要であるという課題が残った。特に、多くの学習者から「意味はわかっても使えない」などのカタカナ語の「使用」に関する声が多くあがった。

従来、カタカナ語は周縁的な存在とされてきたが、金 (2011, 2012) など指摘されているように、生活の近代化により使用が進んだ「テレビ」等の具体的な名詞だけでなく抽象的な語も増え、その一部は基本語彙として定着しつつある。カタカナ語がこれまで使われていた類義語に代わって使用される、あるいは類義語と共存するようになっているのである。これらの語を日本語母語話者は暗黙のルールによって使い分けているが、具体的にどのように使うかについては辞書に記述もなく、学習者にとっては大きな困難点となっている。水口 (2002) では、外来語と類義語の使い分け

1 香川大学教育学部

2 穴吹ビジネスカレッジ

について調査を行い、使い分けの基準に関するメタ言語知識が指導に有効であると指摘している。しかし、使い分けの基準に関する研究は少なく、茂木(2015)でも、困難点の解決に必要な基礎的情報が不足した情報にあると指摘している。そこで、本研究では、効果的なカタカナ語学習を検討するために、カタカナ語の語彙知識の「意味」と「使用」に焦点をあて、カタカナ語とその類義語との使い分けに関して調査を行う。なお、カタカナで表記されるものは外来語が一般的であるが、和製外来語や非外来語のカタカナ表記も増えている。今後、それらを含めた指導が必要になると考え、本発表ではカタカナ語という語を用いる。

2. 研究目的

本研究の目的は、日本語母語話者を対象としてカタカナ語とその類義語の使い分けに関する質問紙調査を行い、日本語母語話者がカタカナ語と類義の漢語あるいは和語を、どのように使い分けているのかを明らかにすることである。

3. 調査の概要

3.1 調査対象者

調査対象者は、日本語母語話者110名(男性14名・女性96名)である。大学生81名、日本語教師29名である。年齢は、10代26名、20代55名、30代12名、40代7名、50代10名である。日本語教師の教育歴は、5年未満11名、5年以上10年未満5名、10年以上20年未満9名、20年以上4名である。

3.2 調査方法

意味の類似したカタカナ語と漢語あるいは和語の使い分けに関する質問紙調査を行った。類義語の使い分けを調査した松尾・西尾・田中(1965)、水口(2002)を参考に作成した質問項目は、①カタカナ語とその類義語のペアを提示して、思いつく文をそれぞれ書いてもらう文産出法の問いと、②両者の違いや気づいたことについての自由記述である。

①の質問項目で産出された文の中で、カタカナ語・類義語と共起する語をそれぞれ抽出した。どのような語とともに使用されているのかを分析し、『日本国語大辞典』(2002)と『例文で読むカタカナ語の辞典』(1998)に記述されたカタカナ語と類義語の語義を用いて、産出文を意味的に分類した。また、カタカナ語や類義語がどのような構文で用いられているかという文法的な側面も検討した。さらに、②の使い分けに関する自由記述を分析した。

3.3 調査語彙

調査に用いた語彙は、広範囲・高頻度に用いられ定着しているとしている考えられるカタカナ語とその類義語である。澤田(1993)にあげられた日本語教育のための基本外来語で、和語または漢語と使い分けられている語のうち、「スル」をつけて動詞化する語(サ変動詞)を選択した。さらに、茂木(2011)の「BCCWJにおける外来語サ変動詞の頻度上位語と辞典等の記述」¹と比較して、BCCWJのコーパスで使われる頻度の高い語を選んだ。それらのカタカナ語の類義語を複数の類義語辞典から選びだし、カタカナ語と類義の和語または漢語との14ペア、次の28語を調査に用いた。類義の和語または漢語のうち、「くつろぐ」をのぞく13語は、いずれも日本語能力試験出題基準(国際交流基金・日本国際教育協会2002)に含まれるものである²。なお、類義語は一対一対応とは限

¹ BCCWJとは国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』である。

らず、複数の語の間に類義関係を持つものもあるが、松尾他 (1965)、水口 (2002) を参考にして、本研究ではペアでの比較を行った。

アピールする・訴える、カットする・切る、カバーする・補う、サービスする・奉仕する、サインする・署名する、スタートする・開始する、ストップする・停止する、チェックする・点検する、テストする・試験する、トレーニングする・練習する、プリントする・印刷する、リードする・率いる、リ(レ)ポートする・報告する、リラックスする・くつろぐ

4. 質問紙調査の結果と考察

4.1 使い分けの基準

質問紙調査の結果、産出文で共起する語が割れ自由記述でも意見が分かれるなど、類義語との使い分けに個人差やゆれのみられる語が2ペア(「テストする」「試験する」と「ストップする」「停止する」)あった。一方で、その他の12ペアでは、日本語母語話者が使い分けに一定の基準を持っていることが明らかになった。本稿では、一定の使い分けの基準があると考えられる12ペア24語に関して分析を行う。

表1に示したように、12のペアには三つの使い分けの基準があると考えられる。基準は、I「カタカナ語に類義語にはないニュアンスが付加されている」、II「カタカナ語のほうが類義語より多義的である」、III「カタカナ語が特定の使用に限られ類義語と役割分担している」である。Iの「ニュアンスの付加」では、例えば、「カットする」はプラス評価につながるイメージがあり、「失恋して髪を切る」の「切る」との置きかえが難しいと認識されている。IIの「多義的」では、「カバーする」は「補う」以外にも「おおう」「全体に力が及ぶ」「カバー・バージョン」など意味の範囲が広く、共起する語も文脈もさまざまであった。III「役割分担」では、「トレーニングする」が主にスポーツの領域で使われ、「練習する」等の他の類義語と役割分担しているが、これらは、多くの先行研究でカタカナ語が取り入れられる背景とされているものである。以下、それぞれの基準について具体的な産出文や自由記述をあげて述べる。

4.2 ニュアンスが付加されたカタカナ語

Iの基準として、カタカナ語に類義語にはないニュアンスが付加されているという点があげられる。Iの基準にあてはまると考えられるのは、「カットする・切る」、「サインする・署名する」、「ス

表1. カタカナ語と類義語の使い分けの基準

使い分けの基準	カタカナ語と類義語のペア
I カタカナ語にニュアンスが付加	カットする・切る、サインする・署名する、スタートする・開始する、プリントする・印刷する、リ(レ)ポートする・報告する
II カタカナ語のほうが多義的	カバーする・補う、サービスする・奉仕する、チェックする・点検する、リードする・率いる
III 特定の使用に限られ役割分担	アピールする・訴える、トレーニングする・練習する、リラックスする・くつろぐ

² 「くつろぐ」は級外にあたるが、日本語学習者用のカタカナ語の辞書や問題集に「リラックスする」の類義の語として記述が見られたため、調査語彙とした。

タートする・開始する」「プリントする・印刷する」と「リ(レ)ポートする・報告する」の5ペアである。「カットする」は、本調査では、「場面をカットする」「時間をカットする」のように『日本国語大辞典』(2002)の「一部を切り取る」という意味で用いられる産出文が最も多かった(37例)。一方、「切る」は、刃物などで「分け離す」、「傷つける」、関係・話などを「断つ」、「辞職させる」など意味が多岐にわたり、中でも「髪を切る」「野菜を切る」といった、つながっているものを「断つ」という意味の産出文が最も多かった(43例)。また、自由記述にも、『髪をカットする』『髪を切る』を比較すると、『髪をカットする』のほうが『切り整える』『改善する』という意味がある」というコメントがあり、カタカナ語は「切る」ことがプラス評価につながるといったイメージがあると考えられる。

また、「スタートする」と「開始する」のペアで、「スタートする」は、「二人の交際」「春休み」「社会人生活」「新学期」「新年」などと共起する産出文が多く(51例)、中でも、「新しい」「新～」を用いた語は20例もみられた。コメントにも「単に始まる、始めるだけでなく、新しい何かが始まるというプラスのイメージ」「軽やかさやいきいきとした様子が想像できる」とあった。これは、松尾他(1965)などの先行研究で指摘されているカタカナ語の「目新しさ・新鮮さ」であると言えよう。また、「マラソンがスタートする」のように辞書の「(速さを競うスポーツで)出発する」という意味の産出文もみられた(25例)。一方、「開始する」は、「試験」「会議」「授業」「戦闘」などのように固いイメージの語と共起し(79例)、「マラソン」「レース」のようなスポーツ関連の語はみられなかった。

さらに、表2は自動詞・他動詞に分けて産出文の例を示したものである。構文的な違いとして、「スタートする」が自動詞として用いられていたのに対し(46例)、「開始する」は他動詞として(73例)用いられている文が多かった。以上の結果から、Iの基準で、カタカナ語には新しさやプラスの評価といった付加的な意味が加わることで、類義語とすみ分けていると考えられる。

「プリントする・印刷する」は、『使い方の分かる類語例解辞典』(2003)にある「版面にインクなどをつけて、文字や絵などを紙や布に写し取る」という点で共通している。「レポート」「資料」「レジュメ」「書類」「年賀状」などと共起する産出文が「プリントする」60例、「印刷する」104例と、ともに最も多かった。しかしながら、「プリントする」は「デジカメで撮った写真」をはじめ、「写真」と共起した文も43例と多数見られた。本来、「プリントする」はネガやフィルムを印画紙に焼き付けるという意味で用いられたが、現在は小型印刷機が普及していることから、家庭で手軽に写し取るという意味で用いられている。また、「プリントする」の意味に、捺染機や型紙を使って布地に模様を染め付けるという意味もあり、「花柄をプリントした布」という産出文が1例、「Tシャツに写真をプリントする」「Tシャツにロゴをプリントする」「当て布して、プリントする」といった例文が12例見られたが、「印刷する」には布地に模様をつけるという意味の産出文は一切見られなかった。一方、「印刷する」は、「報告書を100部」、「原稿を50部」のような部数と共起した産出文(3例)や、「新聞」、「広告」、「投票用紙」、「卒業文集」といった大量の印刷をイメージする語と共起している例文が見られたのが特徴的であった。『プリントする』はカラーで、『印刷する』は白黒、「『プ

表2. 「スタートする・開始する」の産出文の結果

スタートする		開始する	
自動詞	他動詞	自動詞	他動詞
「新学期が」 「夏休みが」 「交際が」 など34例	「リレーが」 「レースが」 など25例	「ゲームを」 「新生活を」 など33例	「レースを」 「ゲームを」 など9例
			「試験を」 「話し合いを」 など97例

プリントする』は写真、ポスター、『印刷する』は新聞、紙など何枚も』『プリントする』は枚数が少なく、『印刷する』は枚数が多い」といった自由記述からもわかるように、共通する意味はあるものの、「プリントする」は写真の焼き付けや布地への模様付けに用いられ、「印刷する」は新聞など大量に印刷するものに多く用いられていることが明らかになった。

4.3 多義的なカタカナ語

基準Ⅱは、カタカナ語のほうが類義語より多義的で、使える範囲が広いというものである。Ⅱの基準にあてはまると考えられるのは、「カバーする・補う」、「サービスする・奉仕する」、「チェックする・点検する」と「リードする・率いる」の4ペアである。

まず、「カバーする・補う」で得られた産出文を辞書に記述された語義を用いて意味的に分類し、どのような語と共に使われているかまとめたものを表3に示す。いずれも『日本国語大辞典』(2002)の①の語義にあたる産出文が多いが、「カバーする」は、「補うこと」(足りない点を補うこと、欠点などを補助助けること、スポーツで味方を助けること)の他にも、「(比喩的に)おおうこと。全体に力が及ぶこと」「カバー・バージョンの略」など、辞書でも幅広い意味を持ち、「補う」の他にも「穴埋め」「補充する」「覆う」「保護する」「隠す」「まかなう」「くまなく～する」など多くの類義表現がある。産出文でも、「ミス」「失敗」などを補う(91例)、スポーツで「相手の動きをカバーする」など5例と多いが、その他にも、「スマホをカバーする」「肌のシミをカバーする」など覆う(13例)、「保険でカバーする」(1例)や、「昔のヒット曲をカバーする」(8例)など多義的である。自由記述でも「スポーツ用語が使われる」など、「意味が広い」という意見が多かった。一方、「補う」は、「不足をみたく」「相手に与えた損害、罪などの埋め合わせをする」の意味であり、産出文で「不足・足りない部分」(44例)、「栄養(素)・水分」(31例)、「言葉・説明」(11例)などの不足を満たす、「損失・赤字」などの埋め合わせをする(12例)がみられた。「カバーする」に比べると使用の範囲が限られていると言えよう。

また、「チェックする・点検する」では、それぞれ辞書で、「完全であるかどうかを一つ一つ調べること」「一つ一つをくわしく調べること」という意味であり、一つ一つ調べる点は共通する。しかし、「チェックする」は個人が行う確認で、より広い範囲で使われており、産出文で「忘れ物・荷物・持ち物」など(30例)、「宿題・課題」(13例)、「間違い・ミス」など(11例)、「鍵・戸締り」(6例)、「電気・火元」(8例)、「服装・身だしなみ」など(4例)や「出席・出欠」など(4例)など、さまざまな語と共起している(表4参照)。また、「予定をチェックする」や「新しいお店をチェックす

表3. 「カバーする・補う」の産出文の結果

カバーする	補う
①足りない点を補う 「ミスを」「失敗を」「欠点を」など91例	①不足をみたく 「不足・足りない部分を」44例、「栄養(素)を」 など31例、「言葉を」など11例
②スポーツで味方を助ける 「相手の動きを」「ディフェンスを」など4例	②損害、罪などの埋め合わせをする 「損失を」「赤字」など12例
③おおう 「スマホを」「肌を」など3例	
④全体に力が及ぶ 「保険で」1例	
⑤カバー・バージョン 「曲を」「歌を」など8例	

表4. 「チェックする・点検する」の産出文の結果

チェックする	点検する
①完全であるかどうかを一つ一つ調べる 「忘れ物・荷物・持ち物を」など(30例)	①一つ一つ詳しく調べる 「忘れ物・荷物・持ち物を」(5例)
「間違い・ミスを」など(16例)	「故障・不備」など(10例)
「宿題・課題を」など(13例)	「宿題・提出物を」など(3例)
「戸締りを」(6例)	「戸締りを」など(3例)
「電気・火元を」など(4例)	「ガス・水道管を」など(25例)
「服装・身だしなみを」(4例)	「車を」(30例)、「機械・設備を」など(25例)
「出席・出欠を」など(4例)	
②確認して心に留める 「予定を」、「お店を」など(14例)	

る」などの産出文も14例みられた。これは、『明鏡国語辞典』(2010)では「確認して心に留めること」という意味で俗語とされており、比較的新しい使い方であると思われる。自由記述でも「軽さ」の指摘とともに、「より広い意味でさまざまな確認の意味で使える」「フランクで広義的」などとコメントされている。それに対して、「点検する」の産出文でも、「忘れ物・荷物・持ち物」(5例)、「宿題・提出物」など(3例)もみられたが、多くは「車」「エレベーター」「自転車」「機械」「設備」など(55例)や「ガス・水道」(25例)などと共起している。自由記述でも、「念入りに専門的に調べる」など、より専門的で高度、あるいは大規模なものであり、車両点検や機械など専門家が業務として「定期的に」行うイメージがあるという。また、「厳密」「安全面」「危険性」に触れるコメントも多い。金(2012)などの先行研究で、意味が拡大し多義語化することでカタカナ語が定着するという指摘がある。これら基準Ⅱの語のように、意味が広がり、さまざまな語とより自由に共起し、複数の和語・漢語と対応しているカタカナ語もある。

4.4 特定の分野に限られるカタカナ語

基準Ⅲは、カタカナ語が特定の分野での使用に限られ、類義語と役割分担しているものである。Ⅲの基準にあてはまると考えられるのは、「アピールする・訴える」、「トレーニングする・練習する」と「リラックスする・くつろぐ」の3ペアである。

「トレーニングする・練習する」のペアは、『日本国語大辞典』(2002)によると「トレーニング」は「練習。訓練。鍛錬。」、「練習」は「学問や技芸などを繰り返して学習すること」とある。向上させるため一定の作業を繰り返して行う意味は共通しており、いずれも「毎日」「日々」「何度も」といった繰り返しを示す語と共起している。しかし、表5に示したように、「トレーニングする」は、「ジムで」「体育館で」などの場所と用いられるものが30例、「筋肉を・筋力を」などある部位を鍛えるものが25例と多くみられた。次いで「体を鍛えるために・体力をつけるために」など(17例)や、「マラソン大会にむけて」など(5例)など、合わせて87例でスポーツに関連する文で用いられている。その他は、「発声を」「ボイストレーニングする」といった声に関するものと「英語の」「漢字スキルを」「読解力を」の学習関連と「よいリーダーに育てるため」などの8例のみであった。一方、「練習する」の産出文も、「野球を」(9例)などをはじめとして「サッカー」や「テニス」などのスポーツ競技との共起が39例と多いものの、他にも音楽に関するものでは「ピアノを」などの楽器(23例)と「歌を」など(7例)、学習関連では習字、漢字や九九などの計算(11例)、語学や話し方(10例)など幅広く使

われている。松尾他(1965)は、「トレーニング」には、教育／音楽／放送の分野でそれぞれ独自に取り入れられた「ドリル／レッスン／リハーサル」といったカタカナ語もあり類義関係が多様であるとしている。和語・漢語だけでなく、このような類義のカタカナ語も含めて、それぞれの分野ですみ分けていると考えられる。

「リラックスする・くつろぐ」では、緊張をとりゆったりした気分になる点では共通しており、「リラックスする」は辞書によると「くつろぐこと」とあるが、言い換えが必ずしもできるとはいえない。表6に示したように、「くつろぐ」の産出文は、「こたつに入って」など(3例)、「横になって」など(2例)、「ネクタイをとると」や「お菓子をたべながら」など「く何か」をしてくつろぐも12例みられたが、ほとんどが、「家で」など(30例)、「部屋で」(24例)、「ソファで」(19例)「リビング・居間で」(11例)、「温泉で・ホテルで」(6例)など、「く場所」でくつろぐの形であった。一方、「風呂で」(7例)、「家で」など(6例)、「部屋で」など(5例)などの「く場所」でリラックスするも24例みられたものの、「音楽を聞いて」(19例)、「アロマで」など(13例)、「マッサージで」(8例)、「～を飲んで」(5例)具体的なく何かをしての形が多い。また、「面接」(6例)、「試験」(4例)、「本番」(3例)、「試合」(3例)などに緊張をとって臨むという文は、「くつろぐ」には置き換えのきかない「リラックスする」のみの用法であり、両者のすみ分けがみられる。

表5. 「トレーニングする・練習する」の産出文の結果

トレーニングする	練習する
スポーツ競技 「ジムで」「体育館で」など(30例)、「筋肉・筋力を」など(31例) 「体を鍛えるため・体力をつけるため」など(11例)、「マラソン大会にむけて」(5例)	スポーツ競技 「野球を」など(9例)、「サッカーを」(6例)、「テニスを」(5例)、「縄跳びを」(4例)など
発声 「発声の」「ボイストレーニング」「プレストレーニング」	音楽 「ピアノを」(19例)、「楽器を」(3例)、「ギター」、「歌を」(7例)など
学習 「英語の」2例、「漢字スキル」、「読解力」	学習 「漢字を」(6例)、「習字を」など(3例)、「日本語の会話を」(2例)「英語の音読を」、「九九を」
その他 「よいリーダーに育てるため」	その他 「面接」、「スピーチ」、「料理」

表6. 「リラックスする・くつろぐ」の産出文の結果

リラックスする	くつろぐ
く場所」で 「風呂で」(7例)、「家で」など(6例)、「部屋で」など(5例)	く場所」で 「家で」など(30例)、「部屋で」(24例)、「ソファで」(19例)「リビング・居間で」(11例)
く何か」をして 「音楽」(19例)、「アロマ」(13例)、「マッサージ」(8例)、「～を飲んで」など(5例)	く何か」をして 「こたつに入って」など(3例)、「横になって」など(2例)、「ネクタイをとると」、「食べながら」
く何か」に臨む 「面接」(6例)、「試験」(4例)、「本番」(3例)、「試合」(3例)	

5. まとめと今後の課題

カタカナ語のサ変動詞とその類義の漢語・和語との使い分けに関して日本語母語話者に質問紙調査を行った。その結果、個人差やゆれのある語がみられる一方で、日本語母語話者は使い分けに一定の基準を持つことが明らかになった。その使い分けの三つの基準としては、Ⅰ「カタカナ語に類義語にはないニュアンスが付加されている」、Ⅱ「カタカナ語のほうが類義語より多義的である」、Ⅲ「カタカナ語が特定の使用に限られ類義語と役割分担している」があり、母語話者はこれらの基準を用いて類義語との使い分けを行っていると考えられる。

今回の調査は14のペアの分析のみであり、すべてのカタカナ語の使い分け基準であると一般化はできない。今後は、より多くのカタカナ語とその類義語を調査語彙として、日本語母語話者の使い分けの基準を検討することが必要である。さらに、日本語学習者にも同様の調査を行って使い分けの現状を探り、カタカナ語の語彙指導のための基礎資料を作ることをめざしたい。

謝辞 本研究は、JSPS 科研費 JP17K02852の助成を受けたものです。

参考文献

- 石綿敏雄(2001)『外来語の総合的研究』東京堂出版
- 金愛蘭(2011)『20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化』大阪大学日本語学講座
- 金愛蘭(2012)「外来語の基本語化」『外来語研究の新展開』おうふう, 29-45
- 澤田田津子(1993)「日本語教育のための基本外来語について」『奈良教育大学紀要』42(1), 225-239
- 陣内正敬(2008)「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』11, 47-6
- 中山恵利子・陣内正敬・桐生りか・三宅直子(2008)「日本語教育における『カタカナ教育』の扱われ方」『日本語教育』138, 83-91
- 松尾拾・西尾寅弥・田中章夫(1965)『類義語の研究』国立国語研究所
- 水口里香(2002)「類義語の使い分けにおけるメタ言語知識の役割」『日本文化学報』14 139-152
- 茂木俊伸(2011)「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析－『カットする』を例として－」『特定領域研究「日本語コーパス」平成22年度公開ワークショップ(研究成果報告書) 予稿集』, 103-110
- 茂木俊伸(2015)「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析－『マークする』を例として－」『文学部論叢』106, 83-95
- 山下直子・畑ゆかり・轟木靖子(2013)「韓国語母語話者に対するカタカナ語の指導の試み－聞き取りテストと意識調査より－」『言語文化と日本語教育』45, 20-29
- 山下直子・畑ゆかり・轟木靖子(2015)「カタカナ語の聞き取りテストとカタカナ語に関する意識調査－韓国語・タイ語・中国語母語話者の場合－」『比較文化研究』119, 81-90
- Nation I.S.P. (2001) Learning vocabulary in another language, Cambridge University Press
- 北原保雄編(2010)『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店
- 小学館辞典編集部編(1998)『例文で読むカタカナ語の辞典 第3版』小学館
- 小学館辞典編集部編(2003)『使い方の分かる類語例解辞典』小学館
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編(2002)『日本国語大辞典 第二版』小学館